

二〇〇五年香港シーンの片隅で

池上貞子

一年間にわたる香港での在外研究をおえて戻ってから、もうすぐ滞在期間と同じくらいの月日がたとうとしている。機会があつて前半の半年間の印象は滞在中に無理矢理まとめた*。今は少し冷却期間をおいたので、同じ事柄をふりかえってもまた別の感慨をもったりしている。

わたしが在外研究の根拠地としたのは、空港のあるランタオ島から見ると、ちょうど北の対岸にあたる屯門にある嶺南大学で、住まいも丘陵になっているキャンパス内のゲストハウスだった。屯門は宋代には南の守りとして軍が駐屯したという、香港では古くから開けたところではあるが、周囲は客家の集落の面影が点々と残っていて、現代の香港（いわゆる「香港」は香港島・九龍・新界の三つの部分から成る）の印象からすると、郊外あるいは田舎にあたる。ただし、山や海を背景に超高層マンションが建ち並ぶ光景はここでも変わらない。チムサーツイエやワンチャイなどという有名な繁華街に出るのには、電車と地下鉄を乗り継ぐか、あるいは直通バスで行っても一時間前後かかる。出発にあたり知人たちに送った挨拶状のなかで、香港の連絡先を「香港屯門 嶺南大学中文系」と書いたが、これは多くの人に、わたしが自分の正確な居場所を教えることを避けていると誤解させた。滞在中、かなり親しくしている中国文学研究仲間にさえ、「送りたいものがあるから、正確な住所を教えてほしい」とメールをもらった。わたしは逃げも隠れもしていなかった。その住所で便りも物も無事届いていたのである。

ところで、滞在中の年末年始の頃、ゲストハウスに韓国の中国文学研究者が一ヶ月半滞在した。一月に嶺南大学で行なわれた国際シンポジウムに参加したひとりなので、すでに顔見知りであった。香港の女性作家のアンソロジーを出版する予定で、冬休みを利用して現地で作家や編集者と話し合いながら翻訳作業を進めるために来たらしく、部屋に閉じこもっていることも多かった。たまに会うと、よく「あなたはそのトシで一年間もひとりで海外に滞在してエライ！」と言われた。ご本人はわたしより数歳年下だと思うが、二〇歳代に香港の中文大学に二年間留学したのを皮切りに、アメリカのコロンビア大学に一年、中国の広州に半年と、海外での長期滞在もたくさん経験している。しかし加齢とともに、長期滞在はつらくなり、広州の半年の時は早めに切り上げたらしい。

研究上の成果はともかく、「そのトシ」のわたしが病気らしい病気もせず一年間を無事に、しかも楽しく過ごせたのは、若い友人たち、とりわけこれから紹介する三人との、親子のような友だちのような、不思議な生活のおかげだと思う。自分の香港体験を語るには彼らのことを抜きにしては考えられないし、彼らを語ることは香港の縮図、あるシーンを切り取ることになる。今あらためて彼らのことを思い出しながら、一年間にわたった自分の香港での在外研究の意味をふりかえってみたい。

三人のうち、最初に知り合ったのは黒一点の李Bだった。三〇歳、山東省生まれで現地の大学を出たあと、広州の大学で修士号を取得、現在は三年間の予定で嶺南大学翻訳学科の博士課程に留学中だ。ふとした仕草に女性っぽいところがあるので、他の二人から「おばさん」とからかわれたりするが、すでに結婚している。自慢のかわいらしい奥さんは広州の大学で勉強中で、お互いよく往き来している。ただし、やはり大陸から香港に出る方が何かとたいへんらしく、一度、一騒ぎがあった。ふたりで過ごす香港のクリスマスを楽しみに妻が深圳で通関しようとしたら、ストップをかけられた。香港側の在留期限は問題ないものの、大陸側の出国期限というのが過ぎていたらしく

い。いつものように学生寮で妻の到着を待ちこがれていた李Bは、連絡を受けてすぐに押っ取り刀で飛んで行った。結局、日本で言う戸籍謄本のようなものを本籍地の山東省まで取りに行くことからやり直し、奥さんが次に来られるようになったのは、半月あまり後のことだった。彼は歌も上手だし、民謡の茶摘み娘の踊りやスーパーモデルの歩き方のまねをさせたら、お腹の皮がよじれるくらいおかしいけれど、感心するほどうまい。親しくなつてずいぶんしてからわかったが、大学に入る前にそういう方面の学校で一年半ほど学んだらしい。

わたしたちが初めて会ったのは、たしか四月末にハワイの研究者たちを呼んで、「East meets West」と称する国際シンポジウムが行なわれたときだった。広東語が飛び交うなかで、彼の流ちょうな「普通話」（標準中国語）はわたしにとって地獄で仏に会ったようなものだったから、すぐに親しくなつたのである。

李Bと同年の女性陳Xとは、滞在一ヶ月あまりたつて、待望の深圳に本を買い出しに行ったときに知り合った。はじめての大陸行きなので、わたしの助手役をしてくれていた黄Jが案内してくれた。陳Xは黄Jの嶺南大学中文系の同期生で、大学の系列にあるコミュニティ・カレッジ（日本で言えば、短大のような位置づけで、卒業後、四年制の方への編入の道が開けている）で「普通話」を教えている。ところで、嶺南大学のある屯門は、香港の繁華街へ行くより大陸側の深圳に行く方が近い。大学前からバスで二〇分間新界を横断すると、古くからある九広鉄道東線の上水という駅に出る。上水から北に向かうと、次の駅がもう香港側の「国境の町」羅湖なので、五分とかからない。それから出国手続をし、歩いて国境の橋を渡る。とは言っても、屋根もついているし、建物の続きだから、大きなショッピングモールのひとつの館から別の館に移るくらいの感覚だ。

一九六〇年代の中頃、学生訪中団が中国に行き始めたときは、現在のように直行便の飛行機は飛んでいなかった。当時大学生だったわたしの友人たちはみなここを通ったはずだ。ただし、当時の橋はガラス張りで屋根のある現在のものではなく、その窓から脇に見える屋根のない鉄骨の橋だったらしい。もっと以前、その後二度と中国

の土を踏むことのなかった作家張愛玲（一九二〇—一九五）は、いつ呼び戻されるかと恐怖におびえながら、大陸側からその橋を渡った。渡り終えたたん、荷物運びの人夫に誘導されて近くの土手まで一気に走り、解放感に顔を見合わせ心ゆくまで笑い合ったと書いている。一九五二年のことだった。

話が遠いところまで行ってしまった（中国語的言い回し）が、現在では多くの香港の人たちが通行証のようなものを持っていて、比較的簡単に往き来している。とくに新界に住む人などは、同じような物でも香港より価格がずっと安くなるため、食事や買い物によく出かける。学生たちにとっては本の安さが魅力だ。とくに深圳には「書城」と呼ばれる巨大書店がいくつもあるので、買うのにも便利なのである。わたしは用心のため二時間の余裕をみて、黄丁と持ち合わせた上水駅に向かった。途中、断続的に台風のような雨風に見舞われた。一部の区間では数メートル先が見えず、まだあまり乗りなれていなかった二階建てバスが一番前の座席に座っていると、本気で身の危険を感じた。後から考えると、これが雨の多い香港の夏の始まりだったのかも知れない。

約束の時間よりも一時間も早く、上水駅に着いた。駅は大陸へ物を運ぶのだろうか、トリコロール模様（中国でよく見かける赤・青・白の幅太の縞模様にそういう呼び方があることを最近知った）の大きなバッグをもった人たちでごったがえしていた。様子はわからないし、空模様も怪しいので、とにかくホームに入って待つ。一時間の間には時折、雨風が襲った。電車そのものは五分置きくらいに出ていて、とても便利だ。約束の時刻に着いた電車の中に黄丁の姿が見えたので乗り込んだら、先ほどから近くに立っていた背の高いホットパンツ姿の若い女性が近づいてきて、黄丁と親しげに話しはじめた。それが陳Xだった。

このふたりが仲がいいのもうなづける。ふたりとも中学生くらいまで大陸で育ち、その後家族で香港へ移民をしてきたのだ。ということ、ふたりとも「普通話」が上手で、特に陳Xは中文系関係の催し物で広東語と「普通話」との通訳が必要なときは、かならず引っぱり出された。黄丁にしても、わたしを受け入れてくれた嶺南大学中文系

の梁秉鈞教授（筆名を也斯と言って、詩人・小説家としても有名）が、人文学センターの職員である彼女を助手役としてつけてくれたのは、わたしの研究室と彼女の仕事部屋が近いからというだけでなく、標準語が上手だという理由もあった。

この深圳行き以来、わたしは陳Xとも急速に親しくなったが、それはまた彼女の和風好みにもよる。彼女には香港在住のアメリカ人の友人がいるが、家族が日本の三沢基地にいるため、よく日本と往き来する。一度、その機会を利用して、陳Xもいっしょに日本へ来て、京都などに遊びに行ったのだそう。料理や縫い物が好きで、京都では着物や布地を買い集めたいらしい。親しくなっただけからは、よく彼女（そして李B）の手料理をごちそうになった。日本だったら、「楚々とした」とか「お嫁さんにしたような」という修飾語がつけられそうだが、もつと骨太な感じがする。旅行が好き（もつとも香港の人は「お国柄」か、みんながそうだが）で、中国雲南省のシャングリラに行ったとき、チベット人の青年と知り合い、目下遠距離恋愛中だ。

最後のひとりジェイは他のふたりより少し年上だ。自他ともに認める「仕切り屋」で、いわゆる姉御肌のところがあるが、とても明るくてかわいらしい。熱心なクリスチャンで、毎週日曜日にはかならず教会へ行き、年間の行事にも積極的に参加する。長い休みの時にはアメリカやヨーロッパにもその関連の活動をしに行ったりする。

彼女との出会いはよく訳がわからなかった。ある時、映画サークル主催で、夜、学内で大陸の最新作の映画（たしか「抹茶の味」というものだった）が上映されるといので、学内に住んでいるわたしも声をかけられた。会場の階段教室に行ってみると、親しくなりはじめたばかりの李Bも陳Xも来ていた。彼らは何かのグループになっているらしい。そこへおしゃれな感じの女性が現れ、わたしが日本人だと知ると、親しげに「こんにちは」「いらっしやいませ」「ありがと」とカタコトの日本語浴びせかけてきた。まわりの人たちも大笑い。わたしがすでに李B、陳Xと知り合いだと聞くと、「それならわたしも友達になる」と言い合った。ただし標準語はあまり得意ではない

らしく、英語で話していた。これがジェイだった。

その時わかったのは、彼らは三人とも同じ学生寮F棟に住んでいて、この時のグループは、F棟に住む学生と舎監、そして舎監の家族だったのだ。ちなみに大学では、研究面ではシンポジウムや講演会が盛んに開かれて、これが大学の業績すなわちポイントにつながり、政府によるスポンサー分配の配慮項目になるそうなのだ。寮活動についてもAからKまでである各棟が寮運営組織を作り、その活動もポイントになるらしい。彼らの住んでいるF棟はかなり活動が活発で、その後わたしは名誉会員のような資格で、詩の朗読会やホテルでの運営委員の交代式パーティー(学長も出席)にまで呼ばれるようになった。

コミュニティー・カレッジの主任であるジェイは寮の方でもナンバー2の地位にあり、舎監(みな教授で一二〇平米くらいの部屋に家族と住んでいる)の次に条件のよい部屋(八〇平米くらい)に住んでいる。ちなみにふつうのチーターである李Bと陳Xの部屋は、六畳くらいの居室にシャワー室とトイレがついている個室である。さらに言えば、学生の部屋は八畳足らずの二人部屋だが、ベッドと机、クローゼット、収納棚などがシステムになっていて、すこぶる機能的だ。わたしも事情があつて、夏休みの間だけ、二人部屋に一人で住んだ。時節柄ほとんど毎日雨で、どしゃぶりの時などは七階の部屋の窓から裏山を見ては、崖崩れの心配をしていた。しかし、それより不安だったのは、共同トイレの入り口が暗証番号方式になっていたことだ。真夜中に寝ぼけ眼で行った時、番号を忘れていたかどうかどうしようなどと、本気で心配したりした。今になってみれば笑うしかない思い出だ。

三人が同じ学寮のF棟に住んでいることがわかり、六月半ばからわたしは学生寮C棟に仮住まいをはじめると、わたしたちは急速に親しくなった。もっとも陳Xはシャングリラの恋人に会いに行き、李Bは奥さんのいる広州としょっちゅう往き来していたので、全員がそろそろようになったのは、八月も後半の新学期が始まる頃からだ。わたしたちが親しくなったのには現実的な理由があつた。六月初めには学年が終了し、学生たちは強制的に部屋を

空けなければならぬ（多くは実家に帰る）。教員もローテンションを組んで長い夏休みに入る。機能としては様々なセミナーなどが行なわれるので、キャンパスは混雑しているが、本来の定住者の姿が急に減ったのである。ゲストハウスのわたしの3LDKの部屋には台所用品も設備も完ぺきだったが、学生寮では自炊もままならなかった。そのことをよく知っている彼らは自分たちが一緒に炊事や食事をするとき呼んでくれるようになり、やがてわたしも何か作るようになったのである。夕方になると近くのマーケットへ買い物に行き、彼らの宿舎の共同台所で作って食べた。そのため、彼らの宿舎の管理人たちとも仲良くなった。ちなみに管理人は委託会社からの派遣だが、男女とも赤いベレーに肩章のある黒い制服姿で、夏にはベレーを肩章のところに挟んでいるのがおもしろかった。

手仕事の好きな陳Xは料理も上手で、自分が工夫した料理などもいろいろ食べさせてくれた。李Bも大陸の男性の常で、こまめに料理をやった。ジャガイモの千切り炒めなどは細くて見た目も美しく、味もよかった。ただひとりジェイは、他の人たちのからかいの言葉を聞いても、あまり得意でも上手でもないらしいことがわかった。

その彼女がある日の午後、電話をかけて来て、今日は自分が食事を作るからいつもの時間に来てくれと言う。行ってみると、結局この日はわたしと彼女のふたりだけだった。本人の好物の鶏の煮物はまあまあだったが、李Bのまねをして作ったジャガイモの千切り炒めは、短冊炒めとでも言った方がいいような代物で、舌触りも悪く、お世辞にも美味とは言いがたかった。ただし彼女が懸命に作ってくれたことはわかった。この日はふたりだけだったので、いろいろ個人的な事柄や香港についての考え方、周囲の人間に対する見方も披瀝し合った。そこでわかったのは、彼女が「香港」という符号で世界、あるいは日本で語られる事柄について、すこしでも内実のある具体例を作りたいと強く考えていることだった。「自分は典型的な香港人だから、自分を見ていけば香港のことがわかるはずだ」という意味のことを何度も言っていた。それはよく思っただけのことではなく、符号がもっている既成の、あるいはあいまいな印象で把握するのではなくて、ちゃんと顔のある、具体的な人間が暮らす場としての

「香港」を知ってほしいということだと思う。

「香港庶民の生の姿を知ってほしい」。ジェイはことある毎にそれを口にし、一度、香港島の東のはずれにある実家にも案内してくれた。彼女は大学の近くのマンションにも部屋をもっているようだし、車も買ったし、何よりもふだんの生活の嗜好などからして、もしかすると裕福な知識階級の家の子なのではないかと思われた。しかし、現在、父親と弟が暮らすその部屋は比較的早期に建てられた高層マンションのなかにあるが、四〇平米もあるとは思えず、本人の言でもまったく香港の庶民層の典型的な住宅であった。すでに定年退職している父親はインテリならぬ工場の労働者だったが、娘の友だちを手料理でもてなすその態度はこれ以上ないほど暖かかった。

そこでわかったのは、ジェイの母親は彼女が小学生の時に亡くなり、その後はずっと彼女が家のなかを取り仕切ってきた。高校と大学はアルバイトと奨学金でまかなった。「こんにちは」「ありがと」「さよなら」といったお定まりの言葉のほかに、彼女の日本語ボキャブラリのなかに「いらっしゃいませ」が入るのは、ずっと寿司屋でアルバイトをしていたせいなのである。ウィークデーはコミュニティ・カレッジでの授業と事務に加え寮の運営で忙しい彼女は、日曜日には教会へ行くことを欠かさない敬虔なクリスチャンであり、土曜日の夜は必ず父親と夕食を共にするために実家に帰る孝行娘なのである。

こんな風であるから、「そのトシ」のわたしに対する気遣いも一通りではなく、途中から気がついたのだが、彼ら三人で相談して、少なくともわたしは学内にいる日は誰かが夕食を作るとか相手をするように話し合っていたらしい。「普通話」の上手ではないジェイも、努めて「普通話」で話すようにしていた。一年間の滞在が終わる頃、みなでよく冗談を言い合った中に、「池上先生のジェイに対する功績は大きい。何しろこのジェイの『普通話』と料理の上達に貢献したのだから」というのもあった。

こんな調子だから、彼らとの思い出は尽きない。研究面では助けになる情報の提供やら資料の解説などでおおい

に協力してくれた。生活面でもわたしが寂しくならないように、不便を感じないようにという配慮からなのか、よくいろんなことに誘ってくれた。ふだんの共同の夕食（手作りあるいは庶民的な食堂での）から盛装のパーティーまで、挙げたらきりが無い。ここでは、「深夜の海辺の三国代表会議」と「池上先生危うし事件（別名、李B誕生祝い）」を紹介してみよう。

それは陳Xがシャングリラへ行っていた時だったから、夏休み中の六月後半のことだったのかも知れない。迷いに迷っていたジェイがついに中古の車を買った。宿舎での夕食のあと、わたしと李Bを夜のドライブに連れていてくれることになり、手近なところで屯門の港に行くことになった。正直、日本で言えば若葉マークの彼女の運転は不安ではあったが、そんなことより好奇心には勝てない。無事港に着くと、ジェイは前にも来たことがあるらしく、駐車場に車を止め、港の突堤の上をどんどん先の方へと歩いていく。はるか対岸には空港の灯りがきらきら輝いていた。

突堤の先端近くで手すりを利用してそれぞれの体を支えるようにして座り、おしゃべりをしながら夜景を楽しんだ。話題は日本のこと香港のこと中国大陆のことに及び、おまけにそれぞれが国を代表する歌まで歌った。もう自分でも何を歌ったか忘れたが、ちゃんと訓練を受けたことのある李Bなどにかなうはずがなかった。彼らふたりが興に乗ると、会話は広東語になる。そうでなくても早寝早起きで、とりわけその日は朝から裏山をひと歩きして疲れていたわたしは、時々意識がすうつと遠のいたりした。

翌日、学生食堂で昼食の麺を食べていると、李Bがやってきて、「昨夜の会議の報告書です」と、「深夜の海岸における三国代表会議報告書」という三枚綴りのペーパーをくれた。昨夜のことが、三国代表者の発言やら行動としてジョークやウィット取り混ぜて大げさに、なおかつおもしろおかしく書かれていた。会議の最中、老齢にさしかかっている日本代表が居眠りをしていただけでちゃんと報告されていた。この「報告書」をまとめるため、李B

はドライブから帰ったあと、明け方までPCに向かっていたらしい。おもしろいことの好きなジェイは大はしゃぎ。わたしも読みながら笑いがとまらなかった。けれども、わたしの引受人の梁教授に見せたところ、「たしかに文章はよく書けているが、彼はこんな暇があったら、博論の一部でも書き始めるべきだ」と一蹴されてしまった。

いずれにせよ、こんな風だから、それぞれの誕生日にも必ずお祝いをした。二月はじめだったか、李Bの誕生日が近づいて彼以外の人間で都合を話し合ったが、結局まともな時間にはみな用事があることがわかった。ジェイの決断で、こうなったら夜中にやるしかない、それもただふつうにやるのではおもしろくないから、自分の言うとおりにしてほしいという。つまり、夜一時過ぎになったら、ジェイが外から李Bに電話して、「池上先生に電話しているのだが、どうも様子がおかしい。何かあったのかも知れないから、ゲストハウスに行って確かめてみて」と頼むから、わたしはソファに倒れているふりをしていこうというのである。

夜一時すぎ、ゲストハウスのわたしの部屋の電話が鳴った。指示通り受話器をとらずにいたら、今度はケータイが鳴った。これも出ないでいたら、やがてジェイと陳Xが大きなケーキの箱やプレゼントらしき物を持って現れた。わたしに「上手に演技をしてね」と言いながら、さっさと玄関ホールと居間の電気を消し、客用の寝室に隠れた。やがて、学生宿舎の方角から人の気配と話し声が近づいてきた。そして二階（イギリス式のため実は三階）のわたしの部屋のドアがノックされた。ジェイたちにはあくまでソファに横になっていられると言われたのだが、あまりせわしなくノックされるので、ついついドアを開けて玄関ホールの電気もつけてしまった。心配そうな李Bと彼の妻の顔が並んでいた。「何かあったんですか」という彼の質問にもしどろもどろ、演技に失敗したわたしはうまく説明もできない。しばらく玄関先で押し問答していると、ジェイと陳Xが笑いながら客間から飛び出してきた。「だめねえ、それじゃ絶対俳優にはなれないわ」と叫んだ。ここで九分通り事情を察した李Bは、妻と顔を見合わせながら、「ほんとうに心配しちゃった」と文字通り胸をなで下ろした。

こんな具合で、あまり退屈も寂しさも感じないで過ごせた。こうした雰囲気やペースを作ってくれたジェイにはほんとうに感謝している。「普通話」は上手ではないし、専門もちがう彼女には、中国文学研究については接点はほとんどなかったが、人としての生き方には年下ながらとても勉強になった。「普通話」が得意で文学に興味を持っている李Bと陳Xには、このような生活者としての友情のほかに、研究の面でもずいぶん世話になった。いろいろな大学や中央図書館で開かれるシンポジウムとか講演会などの情報は、どうしても外国人は見逃しがちだが、ふたりにはよく気を配ってもらったし、可能なかぎりいっしょに出かけもした。とくに広東語中心の催し物の時は、彼らの通訳がなければお手上げだった。彼らがいなかったら、わたしの香港理解は今回可能だった量の数分の一で終わっていただろう。

帰国の前夜には、ゲストハウスのわたしの部屋で手料理による送別会を開いてくれた。この報告では詳しく触れなかつた人たち、彼らの寮の舎監（文革のころ上海で生まれ育ち、修士号と博士号はアメリカで取得して香港で教職を得た。彼についても興味ある逸話がいくつもある）や助手、学生たちも顔を見せてくれた。こういう時、香港では単なる情緒的、感傷的なお別れ会に終わらない。かならず「香港滞在」の感想を述べ、総括をしなければならぬ。

実は、わたしにとってはこのこと自体がいかにも香港らしいと思える。たとえば学生たちもふだんは非常にカジユアルというか、ラフな恰好をしているが、決めるときには黒いスーツでビシツと決める。これは精神的なことにしても同じだ。ふだんはとても人なつこくくだけた感じがするが、然るべき場所ではきちんと挨拶やスピーチをし、自分なりの意見を披瀝する。東と西、雅と俗……香港にはいろいろなものがあるが混在していることはよく言われることだが、ひとりひとりの人間もこの多様性をうまく整理してわがものにしていく感じがする。ちなみにこの時のわたしの総括は、ただただ彼らへの感謝である。

わたしの引受人だった梁秉鈞教授の小説に「京都の路を尋ね求めて」という短篇がある。実はこの小説は張愛玲の小説「沈香屑——第二炉香」(一九四三)のオマージュというかパロディになっていて、九〇年代の香港の大学で教えているイギリス人の男性が、香港のごく普通のOLと結婚して京都に旅行に来る話だ。初めて日本に来た女性にとっては何もかも新鮮だが、七〇年代に古い京都駅で列車待ちをし、京都に対して深い思い入れのある男性にとっては、近代的な駅ビルそのものもそうだし、京都の町のたたずまいも接した人びとも、何もかもがしっくりこない。しかし最後に京都駅の二階のバルコニーのようところでコンコースを行き交う人群れを眺めている時、彼は(彼女も)得も言われぬ居心地の良さを感じる。流動のなかに身をおき、時折、その流れを外から眺める。これは、主人公のイギリス人に仮託した、香港人である作者の偽らざる感慨なのだと思う。

人、物、情報、さまざまなのが交叉して止まない香港。定住性の強い日本から見ると何だか落ち着かない感じもするが、そこにはその時どきのシーンがあり、それは真実だ。わたしは貴重な機会を得て、二〇〇五年の香港のあるシーンに登場することができた。まるで家族のようにして過ごした彼らとも、今後、また別のシーンで共演することになるだろう。李Bとは山東省だろうか、広州だろうか。陳Xとはシャングリラかも知れない。そしてジェイはアメリカやヨーロッパの可能性もあり得るが、やっぱり香港が一番似合うような気がする。

*報告「香港ザ・ポップ——記憶と虚構のはざままで」愛知大学現代中国学会『中国21』VOL. 24 二〇〇六年二月